

依田高齢サービス課長

皆様、こんにちは。

定刻でございますので、ただいまから平成27年度第1回足立区地域包括ケアシステム推進会議介護予防・日常生活支援総合事業推進部会を開催させていただきます。

本日、皆様には、先日ご提出いただきました専門部会参加希望書に基づき、この部会の委員としてお集まりいただいたところでございます。ご多忙の中、ご参加いただき、まことにありがとうございます。

本日の司会を務めさせていただきます高齢サービス課長の依田と申します。どうぞよろしく願います。

早速でございますが、この会議は、足立区地域包括ケアシステム推進会議介護予防・日常生活支援総合事業推進部会設置要綱第6条により、委員の過半数の出席により成立することとなっております。本日、過半数に達しておりますので、会議は成立となります。

皆様からの活発なご意見、ご質問をいただくためにも、迅速な会議進行にご協力をいただきますよう、よろしく願います。

まず、本日の資料の確認をさせていただきます。本日の資料は事前に送付をさせていただいております本日の次第及びパワーポイントの資料、席上に配付しております部会名簿と座席表でございます。山中先生は急用のため、本日ご欠席でございます。よろしく願います。

お手持ちの資料をお忘れになった方ですとか、不足のある方はいらっしゃいますでしょうか。よろしいでしょうか。もし、不足する場合は、後ほどお声かけいただければと思っております。よろしく願います。

続きまして、部会長就任についてでございます。

足立区地域包括ケアシステム推進会議条例施行規則第4条により、部会を設置する場合は会長が推進会議の委員のうちから部会の委員及び部会長を指名することとなっております。今回、諏訪会長の指名により、酒井委員に部会長に就任していただくこととなりました。

また、足立区地域包括ケアシステム推進会議介護予防・日常生活支援総合事業推進部会設置要綱第4条に基づき、部会には部会長の指名により副部会長を置くことができるとなっております。今回、酒井部会長の指名により、山中委員に副部会長に就任していただくこととなっております。山中先生は、先程申し上げましたけれども、ご欠席ということとなっております。

酒井先生、就任のご挨拶をお願いいたします。

酒井部会長

酒井雅男でございます。

足立区の地区法曹の一員でもあります。

本日は、地域づくりとしての介護予防・日常生活支援総合事業についての部会、どのよ

うなものをつくっていくかということなのですが、ある意味、医療・介護・福祉という幹ができたとしても、枝葉、根がなければ多分地域包括ケアシステムというものは動いていかないうであろうという意味で、どのようなものを構築していくことができるのかということ、皆様と討議して、良いものを発信していきたいと考えております。

専門的な力は持っておりませんが、一区民として様々なものを皆様と検討していきたいと考えています。よろしく願いいたします。

依田高齢サービス課長

酒井先生、ありがとうございました。

それでは、今日の進行でございますが、冒頭30分程度、私のほうから介護予防・日常生活支援総合事業の、この部会で何をご検討いただくかの説明をさせていただきまして、その後に各委員の皆様から日ごろお感じになっていることのご意見をいただければと思っております。

それでは、早速ですが、スクリーンをご覧くださいと思います。

(PP)

先ほど部会長の酒井先生からもお話をいただきましたけれども、「『地域づくり』としての介護予防・日常生活支援総合事業」ということで、副題として「全ての区民がいつまでも活躍できる足立区をめざして」ということで、書かせていただいております。

(PP)

こちらの絵は厚生労働省が「地域包括ケアシステムの構築について」ということで、いろいろなところで発表しているものでございます。

目標としては、一番上にありますように「2025年を目途に、要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしが続けることができるよう」ということで、「医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される体制の構築を実現」とうたわれております。

足立区の場合、地域包括ケアシステムの部会3つを設置させていただいております。医療と介護の連携の部会と、認知症の部会、今回、皆さんにご検討いただきます日常生活支援と介護予防の部会の3つの部会を設置させていただいておりますけれども、この部会では、いつまでも元気に暮らすためにということで、生活支援・介護予防、老人クラブ・自治会・ボランティア・NPO等ということで、ご検討いただきたいと思いますと思っております。

(PP)

こちら厚生労働省が示しております「支え合いによる地域包括ケアシステムの構築について」ということで「自助、互助、共助、公助」を、通常私どもは自助、共助、公助と言わせていただくことが多いのですが「互助は費用負担が制度的に保障されていないボランティアなどの支援、地域住民の取組み」ということで、「互助」という言葉もここでは使っております。

この生活支援・福祉サービスというもののの中で「医療・看護」「介護・リハビリテーシ

ョン」「保健・予防」みたいな話で考えていただければと思いますけれども、ここにありますように「本人・家族の選択と心構え」というものも非常に重要で、総合事業をやっていくうえで、選択と心構えというところも重要になってくるのかなと思っております。

(PP)

こちらは「介護予防・日常生活支援総合事業に関する総則的な事項」と、難しい言葉で書いてありますけれども、主旨としましては「区市町村が中心となって、地域の実情に応じて、住民等の多様な主体が参画し、多様なサービスを充実することで、地域の支え合い体制づくりを推進し、要支援者等に対する効果的かつ効率的な支援等を可能とすることを目指すもの」ということで、ここでうたわれている介護予防・日常生活支援総合事業については、今までの介護保険の要支援となっているような方々どうこうだけではなく、全ての方を対象として、地域として取り組んでくださいということがうたわれております。

その背景としては「多様な生活支援の充実」ですとか「高齢者の社会参加と地域における支え合い体制づくり」。ここの部分というのが、今、絆づくりのほうで町会、自治会の皆様ですとか、民生委員の皆様にご協力をいただいている部分で、ここについては絆づくりに着手していますということだと私どもは考えております。

「介護予防の推進」ということで、ここで「生活環境の調整、居場所と出番づくりなどの環境へのアプローチも含めたバランスのとれたアプローチが重要」ということで、ここでも「居場所づくり」という言葉が出てきております。ご高齢の方でひきこもりっぽくなってしまいう方もいらっしゃると思いますので、ひきこもりにならないで、居場所と出番づくり等々が大事だということ、考えております。

次のところでは「地域の関係者間で、自立支援・介護予防といった理念や、高齢者自らが介護予防に取り組むといった基本的な考え方、地域づくりの方向性等を共有するとともに、多職種によるケアマネジメント支援を行う」と書いてありますけれども、こちらについては、いろいろな方々で、ケアが必要な方について一緒に対応を考えていかなければいけないとか、そういったものも含まれてきているのかなと思っております。

認知症については、別の部会でご検討いただいておりますけれども「認知症サポーターの養成等により、認知症にやさしいまちづくりに積極的に取り組む」ということもうたわれておりまして、こちらについては別の部会でもありますけれども、足立区も高齢者の方はどんどん増えていく中で認知症の方が多くなっていくということが想定されておりますので、こちらについても積極的にやっていかななくてはならないと思っております。

先程と繰り返しになってしまう部分もありますが「共生社会の推進」ということで「地域のニーズが要支援者等だけではなく、また、多様な人との関わりが高齢者の支援にも有効でということ、ともに集える環境づくり」についても心がけてくださいということで、ここにありますように「要支援者等以外の高齢者等がともに集える環境づくり」の役割も大事だろうとうたわれております。

(PP)

これからご検討いただく「足立区における地域包括ケアシステムの構築に向けて」ということですが、何もないとなかなか進みづらい部分もありますので、漠然としたイメージだけ、厚生労働省がうたっているものを足立区に置きかえという部分と、何となくのイメージという形ですが、「何歳になっても、住み慣れた地域で最後まで自分らしく暮らし続けることができる新たな『地域づくり』!」というところで、足立区で生まれ育って、足立区で最後までということで、ずっといられますと、認知症になっても住み続けられますという地域づくりが必要ではないか。

それから「自発的な取組みに基づいて、全ての区民がいつまでも『活躍できる場』を地域の中で作り上げていく!」ことが必要ではないでしょうかと、私どもは思っております。

(PP)

少し足立区の現状の説明をさせていただきますと、65歳以上、75歳以上だけでなく、今回、基本構想をつくる際に85歳以上の人口推計も出させていただいております。

こちらの65歳以上につきましては、伸び率2.2%がだんだん下がってきてまして、伸び率ですので実数が下がるということではないのですけれども、0%に近づいていくだろうという人口推計が出ております。75歳以上の方につきましても少し伸びるのですが、ずっと落ちていって波があります。高齢者の中で85歳以上の方は非常に伸び率が高く、10%近くの伸び率を示す場所が出てきています。

(PP)

実数というお話をさせていただきますと、今年度、平成27年度ですと、65歳以上の方という区切りであれば、16万2千人ぐらいです。

75歳以上という区切りでいえば、7万4千人ですが、これが地域包括ケアシステムの完成を目指しなさいという2025年には、65歳以上だと1万人くらいしか増えないという話になっています。75歳以上でいうと3万人とちょっと増えていく。

ただ、ここから先、人口推計上は減少になるという数字になっています。65歳以上は増えるけれども、75歳以上は若干減少傾向ということで、人口推計上は出ております。

(PP)

私どもが着目している85歳以上ですが、平成27年は1万7千人なのですが、2025年、10年後にはほぼ3万5千人に倍増です。これが減ることなくずっと増え続けて、平成47年、20年後には4万6千人ということで、5万人に近づいていくというのが現在の人口推計です。

(PP)

ちなみに、85歳以上の介護認定率を調べますと60%を超えます。

前期高齢者、65歳から74歳までの方の認定率がおおよそ6%ということになってまして、75歳から84歳までの方が23%ぐらいです。85歳になると、60%を少し超えて62%ぐらいの方が介護認定を受けているということになっております。

(PP)

少し介護系のお話をさせていただきたいのですけれども、介護人材の不足というのがあちらこちらで言われていますけれども、これは厚生労働省の推計ですが、全国で2025年に38万人足りないだろう。東京都についても3万6千人足りないだろうといわれています。

足立区において、10年後、どうでしょうというと、先ほどの推計値でありましたけれども、85歳以上の方が10年後、倍になります。そのうちの6割の方が要介護、要支援だという前提に立てば、当然のごとく足立区も介護人材については不足するというようになっていくというのはお分かりいただけると思っております。

(PP)

「介護予防・日常生活支援総合事業は、長い月日をかけて『地域づくり』をしていく」ものだと思っています。今、介護の人材が不足するというお話をさせていただきましたけれども、要介護にならないように長い時間をかけて「新しい支え手と活躍の場を地域の中で発掘し、持続可能なものとして、皆さんにそこでご活躍をいただいて、いつまでも元気でいていただく」。要介護にならないようにするためにどうしますかという話が重要かと私どもは思っております。

(PP)

「地域の人との交わりと継続性を重視し、活躍の場へつなぐ」という形で、今までは「生活支援」というものと「介護予防」と「社会参加」は、何となく切り離されたようなイメージでいましたけれども、これが基本的には「融合」していくのではないかと。

例えばですけれども、サロンに行くことで社会参加をして、そこにいるんな方とお話をしたりすることで、外出して介護予防になりますとか、そういったものが複合的になっていくのではないかとということで居場所づくりという形が大事だろうと思っております。

(PP)

委員の皆様は、各分野でご活躍なさっていらっしゃるので失礼な説明かもしれませんが「地域貢献意欲のある方はたくさんいらっしゃる」のだと思っています。そうした方々に「社会参加」をしていただいて、自発的な取り組みとして「通い・活躍の場」にそれぞれ取り組んでいただいて「仲間意識」を持っていただいて「心身機能の変化に関わらず、なじみの居場所に行っていただく」というのが重要だろうと。当然、認知症になっても通い続けられる場所という話になっていくのですけれども「支え合い」で支える側も支えられる側も「お互いさま」ですよというようなイメージのものがいっぱいあればいいのかなと。そうすれば、ひきこもりにもならないという話になっていくのだと思っております。

(PP)

「地域づくりの過程での結果としての介護予防」という話になるのですけれども、介護予防については、厚生労働省は介護予防教室について運動機能強化型とかいろいろやってきていますけれども、基本的なところで「社会参加」ということで「定期的な外出（外に

出るだけでも介護予防)」ではないですかというのがここ数年出てきています。

「仲間意識」ということで「お互いの見守りが機能し始めます」。お習字教室で誰々さんが来なくなってしまったね、みたいな話が言われていますけれども、仲間意識が重要ではないでしょうか。

「支え合い」ということで、お習字教室などでもお互い助け合いという話が出ますので、こういう「多様な生活支援・サービスなど（活躍の場）」ができてきてもいいかなと。

今、お習字教室とかサロンとか言っていますけれども、別にそこにこだわっているわけではありませんので、いろいろな形があればいいと思っております。

(PP)

今日、これもきちんとご説明をしておかなくてはいけないと思っております、厚生労働省が示している資料が2ページほど続きます。

介護事業所の方も3名ほどいらしていますので、説明をきちんとさせていただくと、厚生労働省は、総合事業について要支援1と2の方は通所介護、訪問介護は総合事業の中のサービスメニューに切りかえなさいということになっています。

一部自治体ですとか事業者の方々で総合事業イコールこれの中の役割分担ですと思っ
ていらっしゃる方がいて、少しややこしくなっていくのですけれども、今年の4月からや
るところが23区では多いのですが、10月から足立区でも総合事業に切りかえることにな
っています。

「現行の訪問介護相当」という方々があって、今までどおり訪問介護員による身体介護、
生活援助については指定されている事業所がやって国が定める基準額と基本的には考えて
ください。提供者は今までの事業所です。

これに対して、厚生労働省は、先程言っている生きがいくりの一環として様々な多様
なサービスも用意したらどうですかという提案をしてくれています。これはあくまでも厚生
労働省の提案なので、このとおりやりなさいというわけではないとなっています。

内藤委員のシルバー人材センターですとか、今までいろいろな団体がやっていただい
ているさまざまなサービスと整合性をとっていきなさいということ言われていますけれど
も、ここにある訪問型サービス「A」については、ここを見ていただいたほうが早いので
すけれども、人員等を緩和した基準で主に雇用労働者でやってください。こちらの「B」
にいくと、今度はボランティア主体でもいいですよというような、今までのプロだけでや
ってくださいではなく、いろんなサービスがあってもいいのではないですかと。

当然ですけれども、少しずつ働く方々の基準が緩和されていきますので、単価が下がっ
ていくという話はあるということで、このメニューの体系については、各自治体が決めて
いいですということになっています。

例えば「短期集中予防サービス」ということで、これまでやっている介護予防教室をこ
こに切りかえている自治体もありまして、中には今まで運動機能だけをやっていた自治体
が栄養指導だけに切りかえたという話も聞いております。

足立区としては、どれをやりますかというのはこれから考えていけばいいのかなと思っています。

(PP)

こちらが「通所型サービス」。デイサービスと言われているところですがけれども、同じように、これまでの事業者がやる場所、ボランティアがやってもいいのではないですかというような形で例示されるという形になっています。

「その他の生活支援サービス」という形で、ここに「その他のサービスは 栄養改善を目的とした配食や、住民ボランティア等が行う見守り、訪問型サービス、通所型サービスに準じる自立支援に関する生活支援からなる」ということで、それぞれメニューをつくったらどうかということで、厚生労働省が提案している形になっております。

(PP)

また元に戻りますと「区民の自発的な通いの場・活躍の場づくりを後押し」していくほうがいいのではないかと私どもは今、思っております、今あるメニューを、先程のボランティアがやっていることを介護保険制度のところに無理やり当てはめるということではなく、いろいろな取り組みをしていただいている中で、当てはまるもの、当てはまらないものが出てくるのではないかと考えていますということの説明です。

(PP)

「通い・活躍の場があれば多様な担い手（生きがい・やりがい）づくりが可能！」と書いてありますけれども、私どもは、生きがいとか、やりがいとかが重要なのではないかと考えております、やらされ感があるべくないほうが、自分が自発的にやるという取り組みが広がっていくのがいいのかなと考えております。

(PP)

大変申し訳ございません。私どもがよくわからないと言っては怒られてしまうのですが、各地域という言い方になってくるのですが、例えば千住は千住、新田は新田、小台・宮城は小台・宮城、入谷は入谷ということで、各地域それぞれ違う特色があると思っております、各地域にどんな資源、通いの場とか活躍の場があって、どのくらいというところがわからない部分もあります。

医療とか介護みたいに届け出制ですとか事業所の指定制みたいなものがない部分もたくさんありますので、まずはそういったものを把握していかなければいけないのではないかと。認知症サロンみたいなものがたくさんある地域と全くない地域が多分あると思っております。

そういった「資源、活躍の場というのがどれくらいありますか」というのを把握していかななくてはいけないので、こういう検討の場を設けさせていただいて、いろんなご意見をいただきながら考えていかななくてはいけないと思っております。

(PP)

では「具体的に『資源』とは何ですか」という話になっていくのですがけれども、生きが

い・やりがいづくりが多分大事なのだと思います。先だって、認知症の部会の中で認知症になっても働き続けられるようなところが重要だというお話もいただいておりますけれども「生きがい」と「やりがい」、ただ働くとかだけではなく、ふれあいとか、趣味でもいいかなと思っておりますけれども、例えばお習字の先生をやっていただくとか、そういうことでもいいのかなと思っております。

家事が得意な方であれば、家事援助等で活躍いただくことも大事なことだと思っておりますし、認知症の方ですとか高齢の方への傾聴ボランティアとか、今もやっていただいておりますけれども、そういった活躍の場もあるのだろうと思っております。

具体的には、ここに少し書かせていただきましたけれども、絆づくりでお世話になっている方々の安否確認ですとか、そういったものも生きがい、やりがいとか、いろいろな意味があってやっていただいているのだと思っております。

(PP)

「『資源』となるのは何か」みたいな話も少しさせていただきたいと思っておりますけれども、一番は元気な高齢者の方にどうぞ活躍いただくかというところが重要かと思っております。先程この会が始まる前に、何人かの委員の先生方とお話をさせていただきましたけれども、お父さんたちという話がやはりどこでも出てきますので、元気な高齢者の方にどうぞ活躍をいただくのかということも重要だと思っておりますし、学生等と書かせていただいておりますが、中退してしまっていて行き先がなくなっている子たちをどうしていきますかみたいな話も考えていかなければいけないのだろうと思っております。

また、シルバー人材センターを書かせていただいておりますけれども、ほかにも町会・自治会以外の支援団体も含めてですけれども、自主サークルですとか、そういったものがあると思っております。

また、物理的資源として、こういったものもありますけれども、ここに書かせていただいているもの以外にもたくさんいろんなものがあるのだと私どもも思っております。

(PP)

今日ご検討いただきたい、ご発言いただきたい内容に少しずつ入っていくのですけれども、ここに書かせていただいた「区民主体の自発的な取り組み、『生きがい』と『やりがい』を持った活躍の場づくり」に向けてということで、「足立区における『既存の資源』『必要な資源』について共通認識を図っていきたい」というのが、この部会の中心的な検討の中身でありまして、こういうのがあったほうがいいのか、当然、すぐにできないものもたくさんあるのですけれども、うちのところではこうしているとか、そういったものもご意見をいただきたいと思っております。

(PP)

繰り返しになってしまう部分もありますけれども「より良い地域づくりのための手段」ということであって「何歳になっても生きがいとやりがいを持って活躍し続けることができる足立区」をつくっていききたい。

例えばですけれども、介護事業者の介護スタッフの方は60歳以上の方がもう2割、3割という話も聞かせていただいておりますけれども、そういった方々にいつまでも介護の現場で働いていただけるのが一番いいと思っておりまして、生きがいとやりがいを持って、希望する方が頑張れる場所をどう提供していくのかということをご検討いただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

(PP)

少し長くなってしまいましたけれども、私からの説明は以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

以後の進行は酒井部会長、よろしく願いいたします。

酒井部会長

詳細な報告、説明ありがとうございます。

改めて、部会長の酒井から本日の議事の進行をさせていただきます。

まず、今、高齢サービス課長から、総合事業はこういうものを考えているという説明がなされたのですが、参加の委員の先生方から質問、どういったものなのか疑問とかがありましたら、まずその点から始めたいと思うのですが、いかがでしょうか。

井元委員

生きがい、やりがい、そのとおりだと思いますし、国が医療機関とかそういう専門機関だけではなくて、地域のいろいろな活動に目を向けてくださったのは本当に画期的なことだと思っています。

ただ、大前提として「選択と心構え」という言葉がありましたけれども、それを別の表現をすると「手挙げ方式」というのですね。要するに、自分が助けてもらいたい、あるいは自分が何とかしたい。その気がある人は、こういうネットワークにひっかかってくるわけです。

それは必要な人の大体3割以下ですね。どんな社会をつくっても7割ぐらいは地域に埋没してしまうのです。

新しい社会をつくる、あるいはいろんなサロンをつくるというのは、ずっと前から実際に一生懸命、皆やっているのです。サロンだって高齢者の関係では200くらいありますし、絆づくりではリストも持っています。

要するに、何か必要かということ、そういう意識のある人はいいのですけれども、ない人に対してどう周りが気づいて、あるいは家族でもいいのですけれども気づいて、寄り添ったり、伴走したりして、その人にやる気を持っていただくかというような仕掛けがないと、何をやっても同じことだと思ってしまうのです。結局、手を挙げた人だけがにこにこして。

けれども、あと7割ぐらいの人はわからない。地域に埋もれてしまう。それでは理想的な社会にはなりませんので、そういう気づき、地域の人でもいいし友達でもいいのですけれども、気づいたら、どこに相談に行って、相談を受けた窓口がどうその人を評価して、サービスへの勧奨というのですか、医療機関でいえば受診勧奨なのですからサービス

への参加への勧奨をしていくかと。そういう仕掛けがまずないと。どんないいものをつくっても、一部の人のためのものにしかならないと思うのです。

そこら辺が今、絆づくり担当課がやっている孤立ゼロプロジェクトは、そういう本人の意識みたいなものはなるべくなしにして、外から半強制的に調査が入ってということをやっているのです。なるべく外に出そう、あるいは人と人とのつながりをつけていこうと。

そういう仕掛けがオールジェネレーションで必要なのかなと思いますし、そういう窓口をどこに設定して、それを受けとめる人はどういう人なのかということが、お互いにみんなはっきりしてくると、いろんなシステムがうまく回りだすと思います。

以上です。

酒井部会長

今のご意見は、多種多様なサービスというものを考えるとしても、手挙げ方式だけではいけないと。そうすると、前提となる「やりたいという意識をつくり出す何かの取り組み」や、もしくは「発信場所がないと埋没してしまいます」というご意見であったかと思えます。

ほかにございますか。いかがでしょうか。

私からよろしいですか。

この事業は、基本的にまとめると、元気な高齢者がいわゆる認知症対策も視野に入れた形で多種多様なサービスを展開して参加していけるということがポイントなのかなと思うのですが、基本的にこの事業全体についての行政、区の関わりというのはどの程度主体性のあるものなのかというのをちょっと確認しておきたいのですが、これはいかがなものでしょうか。

依田高齢サービス課長

高齢サービス課長でございます。

当面は、どういうものが不足していて、どういうものがあつたほうがいいのか、そういう地域資源の確認というものと、ここにいらっしゃる委員の皆様がふだんお感じになっているところのご意見をいただいて、区としてどういうものがこの先重要なのかというところを精査したいと思っています。

その上で、先程の介護のメニューの中で、介護のサービスメニューとして必要なものが出てくるのであれば、それは介護保険制度の中に適用するとか、補助金を出すとか、そういったものも考えていかなければいけないかなと思っております。

(PP)

ここの画面上にありますけれども、厚生労働省は訪問型サービスBで、住民主体の自主活動として行う生活援助等については補助したらどうですかということをやっております。これを一部の自治体は、先にこれはこういう単価ですよ。こういうサービスをやってください、こういう単価をお支払いしますと出して出している自治体もあります。

そうすると、ここで手を挙げる人だけがほしいのですという話になっていくのですけれ

ども。できれば逆で、こういうものがが必要です、こういうことをやりたいですというものが出揃ったときに、どういう条件でやってもらいますかみたいなものも検討していきたいと思っています。

(PP)

例えばここにも住民主体による支援で、体操、運動等の活動など自主的な通いの場をボランティア主体でつくっていただければ、開設補助等をしたらどうですかと厚生労働省は提案しています。

ただ、今、足立区内にはたくさんのサロンがありますので、これからつくるところだけ補助をするのですかとか、そういう話もありますので、考えられるとすれば考えられるのですけれども。そこを補助するとか、補助しないとか。こちらは委託になっていますけれども、委託をするとか、しないとか。そういったものについてはきちんと慎重に考えなくてはいけないかなと思っています。

例えばここにある通所型サービスAで、緩和した基準によるサービスとありますけれども、ここも例えば面積要件を少し緩和してデイサービスを開いていいですよとか、スタッフが少し少なくとも開いていいですよみたいなところでやっている自治体はありますけれども、どこまで区のほうでやりますかというところについては、皆様方からいろいろな意見をいただきながら、必要があると思えば、介護保険上という地域支援事業の一環として、補助金とか委託とかというのを考えていく時期が来るのかなと思っていますけれども、現時点ではそこまではなかなか判断できないというところです。

例えばですが、これから認知症の方が増えていくだらうというなかで認知症サロンがもっともっと必要ですという意見になれば、そこをどう区としてサポートして開設していただくのかという話は出てくるとは思っていますけれども、中身によってかと思っています。

先程の男性の方のひきこもりをどうなくするかというあたりもご検討いただいて、そのために何か補助とか支援とかが必要なのかを考えていくか、いかないかというところも。

お金がいっぱいかかりますので、その状況、状況を見て考えていくべき問題かと思っています。

そんな形でもよろしいでしょうか。

酒井部会長

やりたい人、意識を引き起こす、作り出していく、見つけ出していくという作業については、どのサービスを展開するにしても必要だと思うのですが、今の話を聞いて、つまり一定のサービスをやっという話が動いてきたら、その段階で一定の広報なり、このサービス提供の事業に参加しませんかというような、いわゆる発信の事業というか仕事に、区のほうで協力をしていただけることはあるという理解でもよろしいでしょうか。

依田高齢サービス課長

地域のちから推進部の区民参画推進課で今、あだち皆援隊という事業をやらせていただ

いていて、ボランティアとかNPOというか、地域に活躍の場を求める方々のための講座をやっています。

今までも発掘のための仕事というのをやらせていただいているのですが、NPOがボランティアを募集するときに、区で募集をかけてあげるとか、かけてあげないとかという話が適切なのかどうかも、状況によって違いますので、その都度検討させていただかないのかなと思っています。

例えば今、NPOはいっぱいありますので、このNPOだけ募集するというと、ずるいと言われる可能性もありますので、状況、状況で考えていくしかないかなと思っています。申し訳ありません。

酒井部会長

それでは、質問等、まだありますか。どうでしょうか。

お願いします。

茂出木委員

民生委員をしております、茂出木と申します。

地域には、絆のあんしんネットワークという組織がありまして活動しておりますが、まだこれからもっと充実させていかななくてはならないとは思っているのですが、現在、既存の資源を地域で考えてみますと、結構町にはたくさんあるように思いました。

それこそ、地域包括センター、地域学習センター、住区センター、そのほか、いろんな教室や催しも行っていますし、本当に老人クラブ、自主サークルもあります。

実際にそれを利用して、先程手挙げ方式でもありましたが、そういう既存の資源をどのくらい利用されているのかというところで、実際はもっともっと利用してもらえればと思っています。

あるひとり暮らしの80歳くらいのおばあさんですが、老人クラブや住区センターなどに足を運んでみてはいかがですかとちょっとお声をかけたことがあるのですね。そうしたら、もう既にグループができあがってしまっているから入りづらいのよと、なかなか自分一人では行きにくいという答えが返ってきた方がいらっしゃいました。

また、ある60歳代後半の女性ですが、二、三年前に私どもの地区に、マンションを買われて引っ越してきたのですが、その後、ご主人が亡くなられて、お子さんもいなかったこともあって、ひとり暮らしになってしまってひきこもってしまったようなのです。そうしたら、甥の方がおばさんを心配して、民生係に連絡が行って、私のほうに連絡が来て、こういう方を心配しているので、ちょっと様子を見て、少し地域にひっぱりだしてあげて、何か外へ出るきっかけをつくってもらえませんかということがありまして、その方につか教室を紹介したりしまして、その中で、毎日住区センターで行っているラジオ体操があるので、住区センターもどこにあるのか、まだ地域の知り合いも少ないし、なじみが少ないので、一人で行くのはあれなのでということで、私が付き添いました。その方にはいろんな教室もお声をかけたのですが、ラジオ体操をとても気にいってくれまして、ずっと

続けていたのです。時々お顔を見られて、住区センターでお会いすることもあるとあって、元気に続けていらっしゃるのだなと思っていたのですけれども、去年、ラジオ体操にお顔を見せなくなったということで、住区センターのほうから地域包括支援センターや私のほうにも連絡がありました。夏の暑いときでしたので、熱中症と認知症も少し入ってきてしまって、家の中でぼうっとしていたようなのです。それでも、ラジオ体操に参加していたことで、このごろ顔を見せないねということで、地域と多少なりともつながりがあったことから、大事に至らずに済んだということがありました。

私は思ったのですけれども、何かとつながっていることは大事だと思いました。

あと、回覧板とか掲示板などで、町のお知らせや何かこういうのがありますよと結構いろんな案内は出されているのですが、なかなか一人では参加しにくいものなので、例えば近所で実際に参加されている方が、ちょっと声をかけて、一緒に様子を見に行きませんかとか、ちょっと後押ししていただくと、もう一步踏み出せる方は結構いらっしゃるのかなと思っています。付き添って同行してあげるような、個別の声かけみたいなことが意外と重要なのかなと思ったのです。

現在、いろんな形で団体サークルの活動をしている、そういう人こそ何か人的資源になるのではないかと思いました。

以上です。

酒井部会長

ありがとうございます。

高齢サービス課長からの報告と説明を受けて、今、出たところは発信の重要性と、既存のサービスについてもやはりさらなる充実化が必要であると。特に発信が必要であるというお話が出たと思います。

それでは、本日の中心的な議題であります、地域における既存のサービス、新たなものを含めて、必要なサービスについて、各委員から様々なご意見を伺いたいと思います。

できれば皆様、1回は発言いただけるようお願いしたいと思います。

まずは、指名する形ではなく、どなたかから始めていただければと思います。

お願いします。

村上委員

老人会の村上と申します。

老人クラブでの悩みごととよく合致している問題があまりにも多すぎて、頭が混乱しているのです。

その中でも、今の老人クラブの会員がうんと減っているのです。なぜといいますと、ひきこもってなかなか皆のところに出てこれられない。そういう問題を抱えているものだから。

会員増強のためにも、何が何でも女性はコミュニケーション能力が高いですから、女性の力をうんとお借りして。言葉は悪いのですけれども、うんと利用させていただいて。こ

れから会員増強のために、地域でひきこもっている人、何もやっていない人に声をかけていただけるよう、今日、女性委員会の新年会があったものですから、まず、それをお願いしてきました。

もう一点は、高齢者の居場所づくり。これが非常に問題なのです。自分の地域では住区センターや何かはありますけれども、住区センターまで行くのは嫌だと。自分の地域で集まるところがないかなと。

これはなぜかといいますと、ひとり暮らしの方がおしゃべりする機会がない。一人で食事をしている。一人で食事をしているということは、どう見てもおいしくない。やはり皆と一緒に食べるのが食事である。ですから、私は、老人会としてサロン活動をすごく重要視しているのですけれども、なかなかサロンを開く場所がないのですよ。そういった場所に関して、社会福祉協議会のほうで進めているものですから、何としてもサロンを開設して、そこに地域でひきこもっている人たちが自由に来ておしゃべりできる、お茶のみ程度できるようなサロンをつくっていきたい。

それにも絶対的に女性の力が必要なのです。男だけでは絶対にこれはできませんので、女性の力を借りながら、そういった方面をこれからやっていけたら素晴らしいことかなと。これは老人会ではなくて、町会を巻き込んでやっておこうかなといつも思っているところです。

そして、居場所づくりができれば、自然に集まってくれば、そうしますと、集まってくれた人が、今度はその中から有能な人がいるかもしれないのですね。今度はそういう人たちを利用して、次のステップに行けたらいいかなと私は思っています。

以上です。

酒井部会長

集まる場所がほしいということですね。

それでは、ほかにいらっしゃいますか。

お願いします。

日比谷委員

社会福祉協議会事務局長の日比谷です。

今、村上委員から、サロン活動の話がございましたので、そのことについてお話をしたいと思います。

社会福祉協議会では、現在、70カ所ほどのサロンを支援しております。サロンの支援というのは、立ちあげ時にいろんな費用がかかるということで1万円。それから月々の会場の借り賃とか、その点については最大3千円まで補助をしているということで、住民の方にサロン活動をしていただいているところでございます。

昨年、そのうちの十数カ所、私自身、回りました。地域学習センターでやっているところもあれば、団地の集会室、あるいは個人の家を開放してやっているところもございました。その中で印象的だったのは、参加者の9割は女性ということでした。

数少ない参加者の男性に、そこへの参加理由とか動機とかについて聞いてきましたところ、多くの方は役割があるから来ていますということでした。

例えば楽器の演奏ができるからとか、この会の代表だからとか、鍵の管理を任されているからということで、1回は来るのだけれども、なかなか継続して参加するというのは、何らかの役割がないと、男性は来にくい傾向があるのだなと思いました。

もう一点はゲーム性というところですね。唯一サロン活動をやっているところで、会場で男性が多かったのは健康マージャンをやっている場所でした。ゲーム性というのが大事なかなと思いました。その後、ある地域では男性を中心にやはり健康マージャンのサロンを立ち上げたりしたことがございますので、孤独死、孤立死の多くを占めるのは男性という状況の中では、男性がいかに参加できるか、先ほど村上委員からのお話もありましたけれども、その仕組みづくりが大事なかなと思っています。

もう一点は、地域資源の確認ということでお話がございましたが、社会福祉協議会ではあったかサービス事業と高齢者身の回り応援隊事業ということで、一般区民の方で清掃等のサービスを提供したいという人と、それを必要としている人をつなげる事業を行っております。先ほど総合事業の説明がございましたけれども、この中で、既存のこの事業をどう形成していくかということが我々の一つの課題かなと思っております。

私からは以上です。

酒井部会長

ありがとうございます。

お願いします。

内藤委員

足立区シルバー人材センターの内藤と申します。

日ごろから、シルバー人材センターは、医療でもない、介護でもない、その中間に属していると思っているわけですが、先ほどのパワーポイントあるいは酒井先生のお話、各委員のお話をお聞きしまして、ますますシルバー人材センターの中間的、社会的なポジションが明確になってきたのではないかと。そんな思いもございまして、ちょっとお話をさせていただきたいと思っています。

シルバー人材センターの概要はご承知かと思いますが、申し上げますと、現在、足立区内で3,700人の会員がございまして、入会資格が60歳から。あとは無制限ということで、最高齢会員は97歳です。60歳から97歳の方が所属しているということです。先程出ておりました女性ですが、3分の1が女性会員でございます。本来は半分ぐらいいてもいいのではないかと思います。現状は3分の1でございます。そういう構成になっているわけですが、基本的な入会資格は先程の60歳以上と同時に、健康で働く意思のある方であれば、どなたでも入会ができる、そういう仕組みになっております。したがって、働くということが、まず、中心的な存在になっています。

働いた結果、どういうことが起きるかといいますと、生活に生きがいができるというこ

となのです。

何らかの形で現場に行かなくてはいけない。公園のお掃除であるとか、駐車場の整理だとか、そこへ行かなくてはいけない。そういうことですので、そういった意味でも生きがいのある生活ができる。当然、そこに行けば、仲間とお互いに接触する機会ができるわけです。

働くということは、仲間なくしては絶対できないという仕組みになっておりますので、仲間づくり、支え合いと、そういうことができるのではないかと思います。

これは、体験的にも申し上げられることですが、働くということは、健康維持にかなりの部分でつながっていると私は自信を持って言えます。場合によっては、健康増進にもかなりの部分でいくのではないかと思います。生きがいがあって、健康維持増進ができる。

もう一つ素晴らしいことは、働くことによって何がしかの報酬を得ることができるわけです。そうしますと、一つは、働くことによって社会貢献ができていくということ。そのこと自体が労働力を提供したという形で社会貢献ができています。もう一つは、そこで収入を得ますから、それが必ず消費に回るということです。高齢者のことですから、あまり遠くへ行って消費することではなくて、比較的この足立区内で使うということになれば、これが商業の発展にもつながっていく。そういった中で、またさらに今度、もっともっと仕事をたくさんしようではないかと、そういった意欲につながるということなのです。ですから、こういった好循環なものをつくっていけば、私は素晴らしい部分ができるのではないかと考えています。

ただ、現在3,700人といいますと、一見多いようでございますが、足立区の60歳以上の人口は20万人超なのです。そうしますと、パーセンテージ的にはたったの1.8%なのです。大変低いわけです。この会員をもっと増やさなくてはいけないということで、数年来やっておるのですが、先程の村上委員のお話ではないのですが、年々減少傾向にある。高齢者は増えるけれども、会員は減っていくという傾向があるのです。

なぜかということをお考えすると、世代が変わると考え方もどんどん変わってきているのです。それに対して若干、シルバー人材センターとしてのミスマッチ的な語りかけがまだあるのではないかと。創業してもう35年経っているわけですがけれども、まだまだ高齢者はどちらかと言えば弱者であるという概念がどこかの部分に残っている。

そうではなくて、まだまだ高齢者は、逆に若い人以上に力も知恵も持っているんだということに対して、何かもう少し呼びかけをしていく。そういう仕組みをつくっていけば、もっともっと多くの高齢者が入会する。入会すれば、社会参加のきっかけがつかれるから、ますます元気になっていく。

そういう形に結びつけていきたいと思っておりますが、一つの組織だけの力ではこれではできませんので、ぜひこういった会の中で、皆さんと一緒に仕組みをつくっていけたら大変いいかなと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思っております。

以上です。

酒井部会長

ありがとうございます。

シルバー人材センターの中で、前提としては仕事だと思のですが、その仕事を確保しなければ、割り振りするものがないわけですね。仕事を集めるという点ではどういった工夫があるのかとか、実際、増やしていきたい意向があれば、どういう部門、分野であるのかというのをお聞かせいただければ。

内藤委員

おっしゃるように、仕事を媒体として元気をいただくという仕組みでございます。

仕事につきましては、区のほうから仕事もいただいております。就業開拓員という専門員を設けまして、いろんな民間企業にも行って、仕事をお願いしていくというスタイルですね。

ただ、ここで言えることは、ある程度高齢者ということもありますので、フルタイムで働くというわけにはいかないわけです。短時間で臨時的な仕事ということになります。そういう仕事を探すためにも、相当の工夫をしていかなければいけないということですから、総合的な形で皆さんのご理解もいただかないと、なかなか仕事もないということになると思います。

酒井部会長

ありがとうございます。

村上委員

すみません。シルバー人材センターの内藤委員に聞きたいことがあるのですけれども。

今、この問題が出てきますと、介護保険から派遣される人たちのお金と、シルバー人材センターから何の資格もない人たちが働きに行った場合、1時間でもいいよとか、1時間幾らでやるというわかりやすさをもう少しPRしなくてはいけないと思うのです。わかる方がいないのではないかと思いますので、その辺をもっとPRしたらどうでしょうか。家事のお手伝いというのはそんなに長い時間ではないですから、せいぜい1時間とか2時間でしよう。そういったものを、大丈夫ですよというのをやったらどうでしょうか。提案です。

内藤委員

ありがとうございます。

酒井部会長

やはり広報の必要性ですね。

それでは、ボランティア連合会のほうからいかがでしょうか。

緑川委員

足立区ボランティア連合会の緑川と申します。よろしく願いいたします。

私どもは、いろんな活動をしている団体の集まりでございます。

その割には男性が少ない。男性の参加者といいますか、男性の方は退職されてからのボ

ランティア入会ということが多いのです。先程村上委員もおっしゃいましたけれども、女性はそれより以前から活動しているということも多くありまして、多分、女性のボランティア活動者が多いのだらうと思うのです。

ですが、私が最近感じますのは、大勢の男性の方にも参加していただけないと。活動がますます増えてくる、いろんなことに対しまして対応していけないのではないかと思います。しかしながら、思いますのは、男性の参加者がいかに少ないか。その辺をどうしたらいいだらうと、いつも考えております。

私はお話サロンをやっております、先程村上委員からお話も出ましたし、社会福祉協議会の日比谷事務局長からもお話しいただきましたが、やはり男性が少ないのです。一人でも多くの男性の方に参加していただきたいと思ひまして、本当に声かけはしております。そうしましたところ、ほかの団体からそれでは手伝おうではないかと。男性の方なのですが、女性のなさる折り紙であったり、手芸であったりといういろんな特技を持っています、それをいかせるなら参加していいよということなのです。

ですから、特技であるとか、趣味であるとか、いろんなものを持っていらっしゃる男性で、まだまだ家に閉じこもっていらっしゃるというのでしょうか、資源として活用していない部分があるのではないかと思います。その辺をどのようにして家庭から引っぱりだして、活動に参加していただければいいのかと、常々考えております。

先程おっしゃっていましたが、いかがでしょうか。男性の方にその辺をお聞きしてみたいと考えております。

村上委員

私は早くからやっているから、そういった感覚がないのですね。

内藤委員

先ほども村上委員からも指摘があったのですが、いろんな意味で広報ということが大切ではないかと思うのですよ。

いわゆる市場、マーケットに対してコミュニケーションを図る。メッセージを送るということについては、比較的我々は少し遅れているのではないかと。日ごろ、例えば新聞に入ってくるチラシ広告、これでもか、これでもか、いかにうちの商品が安い、いいかということをおそこまで熱心にやっていますね。テレビのコマーシャルも、およそ私には無縁なものでも、嫌でも飛び込んでくるという形で、何とか自分の持っている魅力とか、あるいはあなたに対するメリットというものを、いろんな形で媒体を通じて呼びかけている。

そういうことを考えていくと、シルバーだけを捉えていけば、相手のほうがシルバーを理解してくれているのではないかという思い込みがあるのではないかという気が最近してきたのです。

だから、これからは、今、緑川委員がおっしゃったボランティアにしても、我々もしたいという気持ちはあるのですけれども、具体的にどこにどう行ったらいいかという部分と、多少の恥ずかしさというものを払拭してくれる場面がぜひほしいと思ひている次第です。

村上委員

いいですか。

今、緑川委員が言われたように、どの地域にどういう特技を持っている人がいるかというのをわからなくてはいけないわけですよ。

まず、それが分からないのです。それが分かることになれば、積極的に自分のところに来て活動してくださいとお願いに行っているのですけれども、どこに持っていくか分からない。これが一番の悩みです。

ですから、自分たちが発掘するときというのは、また女の人で申し訳ないのですが、女の人ですと、意外とそういった隣近所の情報を得るのが早いのですね。そういったところから少しずつ攻略しているのです。

ですから、女性の方、隣近所、向こう三軒両隣ではないですけども、みんな井戸端会議で鍛えられている人たちですから、うんと発掘していただいて、そういう情報があれば、自分たちで積極的に働きかけられる。こういったところになります。

緑川委員

男性の参加者が少ないということで、私どもボランティアに登録している人間は全体で700何名いるかと思うのです。

ですが、実際に活動しているのはそんなに多くありません。そして、事あるたびに、まず、とっかかりといたしまして、ご主人にボランティアのことをよく話していただいて、ぜひご主人を引っ張ってきてほしい。そこから男性の参加が始まるのではないかということをお話しているのです。

ところが、なかなか男性の参加者は、いくら奥さんから声がかかっても、おまえがやっているから俺はいいのではないかというような。なかにはおまえが出なかったら出てもいいよというような声も聞くことがあるのです。ですから、男性が出ているから女性は家にいなくてはならない。逆に、女性が家にいるから男性は出られるということではなくて、その辺はもっともっと社会参加するという意味で、積極的に出ていただきたい。

ただし、先程からお話が出ておりますように、発信していくところ、場所、窓口みたいなものをもう少し積極的に、どうぞどうぞという感じで受け入れていただけるような形のものが、あと一歩出てほしいと。

来られた方は受け付けます。

ただし、もっともっと積極的に受け入れるという努力をしていただければまことにありがたいと、ボランティアサイドといたしましては感じております。

以上でございます。

酒井部会長

今、まさに具体的な資源とは何かというビジョンが出ている部分が話題になっているのかなと思います。

本日、サービス事業者の方もの参加していただいておりますので、サービス事業者の立場

から、今日の議題について思うところ等、お話しいただければと思います。いかがでしょうか。

武田委員

通所部会、デイサービスの部会をさせていただいています、武田と申します。

まず、資料にございましたとおり「物理的資源」というところの右上に通所事業所と書いていただいている。

そこはまさに私たちデイサービスの場所なのですが、資源としては日中デイサービスの事業をやらせていただいておりますので、その意味で早朝と夕方以降と真夜中というのは空いているわけではありません。最近ですと、世の中を見ていると、五反野駅とか北綾瀬駅あたりに24時間のフィットネスクラブなどができたりしていますので、そういう意味では時間を限らず、いろんな物件の物理的な資源というものはどうしても価値はあるのだろうなと思っております。

そういった中で、今までのお話もお聞かせいただいている中で、先程来あります「やりがい、生きがいをつくる」という観点で、ちょっと私がいつもうちの社員たちに伝えている、ふと思いついたことがあって。

私はデイサービスをやらせていただいているのですが、うちをご利用くださっている方はひとり暮らしの方が非常に多くて、その方々のご家族様、例えば息子さんであったり娘さんであったりといった方のご意見を聞いていると、昼と夜が逆転してしまう生活であったり、冷蔵庫に賞味期限切れのものが入っている生活というものをご家族の方が見たときに、うちの親は認知症が進み始めているのではないだろうかという心配をされるようなお話をたまに聞くのです。よくよく考えたら、私はひとり暮らしなのですが、私は、次の日やることがないとまさにそれになるのです。朝まで飲んでしまおうとか、3時、4時まで見たくもないテレビを見てみるとか、お昼過ぎに起きて、何となくお昼だからお昼ご飯を買いに行って、家に帰ってくると、別に食べたくないから冷蔵庫に入れて、月曜日からまた普通に仕事をすると、いつの間にか賞味期限は切れるのです。今、私が30代だから問題ないのですが、年齢がいくと、これは問題児扱いされるなど。

ここで言いたいのは、私が社員に言っているのは何かというと、やることがないということがそういうことを引き起こしてしまうので、やることがあるという状態をつくってあげること。

私たちはデイサービスなので、デイサービスに来るのだということが大事な仕事であるということをご利用者の方に感じていただく。それは別に私たち職員に相對でも、利用者様の「仲間に会いたい」でも、とりあえず「そこに行くことが自分の仕事」というか、やりがいというか、そういうふうに思っただけのような空間、場所をつくりなさいということを書いて、まさに生きがい、やりがいという話をふと思いついていたのです。

ただ、先程そういった生きがい、やりがいの場を提供したところで、大多数の方が埋没してしまうというお話もあって、では、大多数の方をどうやって掘り起こすのかというこ

とを考えたときに、ちょっとこじつけ的なところもあるのですけれども、埋没した方を連れ出すことをやりがいに感じてくれる方を何とか管理できないか。

以前、私は、介護の仕事をする前に、フィットネスの会員集めのコンサルティングをさせていただいていたときがあったのですけれども、仲間を連れてきてくれる方だけを重点的にフォローするということをしました。その方はフィットネスに来ていただいているのですが、フィットネスはしなくていい。おしゃべりだけをしていただくという、ちょっとおかしいことをやったことがあったのですけれども、ふとそれも思い出しました。

埋没している方を動機づけして、モチベーションして、みんなと一緒にいるということに安心してもらおうとか。

私たちはサービス事業者なので、ほとんどの人が受けている研修の中で、導入段階のテキストに書いてあるのですけれども、マズローの5段階欲求という、皆さん、よくご覧になる三角形の図の、真ん中には社会的欲求という所属欲求というものがあまして、人はどこかに所属していることで一つの安心感を得られるというところは確かにあると思っておりますので、連れてきてくださるといいうやりがいを持ってくださっている方と、そんなところに行きたくないよと言いつつも来ることで安心してくださるといいう欲求も両方満たされるのではないかと、何となく思っております。

そういった意味での資源というものの活用と、もう一つの、何となくふと思いついたものなのですけれども、年が明けてから、安倍総理がICTの活用ということをいろいろおっしゃい出しましたけれども、ここに高齢者の視点というか、高齢者がICTの開発に関わるということが何かできないかなと最近思っております、どちらかというといふとICTの開発という、事業者側のICTを使う側の視点であったり、メーカー側の視点が非常に多いと思うのですけれども、実際にそこに関わる利用する高齢者の方の使い勝手であるとか、どういうものであれば自分の生活になじみやすいとか、どういう発信をしたいとか、そういったことに開発段階から関わることは、先程来、サロンなどでも男性が少ないというお話がありましたけれども、技術分野出身の高齢者の方とかであれば、関心は持っていたのではないかと思うのです。そういう意味では、一つのやりがいになるのではないか。

今、世の中でいるんなICTの活用とされていますけれども、ほとんどの創業者もまだ世代としては若いと思いますので、そういったところの視点での開発というのはなかなかできないのではないかと思うのは、そういったところに関わってもらえると新たな資源として面白いのではないかということをおもいました。

あと、これはちょっと、なかなか難しい。ハードルが高いのはわかっているのですけれども、男性の集まる場所というのを聞きながら、ふと思ったのは、俺の認知症自慢みたいな会ができないか。これはいろんな面で難しいのは理解しているのですけれども、やはり時が経つといろんな武勇伝を語り出すのが人間だと思っておりますので、そういった中で、そういう場所があると。ただ、それを話すことが難しいのも重々理解の上で申し上げてお

りますが、そんなことができたなら何となく面白いなとふと思いましたので。

以上です。

酒井部会長

男性の方を資源にするさまざまなものを挙げていただいたと思います。

それでは、鵜沢委員。

鵜沢委員

居宅介護支援部会の鵜沢と申します。ケアマネジャーの仕事をしております。

今、お話を伺っていて、ケアマネジャーですから、私たちが関わる場合は、既に介護保険を利用している。これから利用しようとする方なので、今、語られていることの一部の方の対象でしかないのかなと思うのですが、その上で、例えば生きがいづくり、介護予防等、今の介護システムの中でいくと、要支援1、2あるいは要介護1、2。軽度の方が割とそういった意識を高く持って、例えばデイサービスであり、リハビリのサービスでありということをお受けになっている方が多数いらっしゃると思います。

今、聞いていたものは、本当にたくさんの方がサロンであり、地域の活動をやっていらっしゃるのに、一度介護保険を利用しだすとなかなかそこから抜け出せない現状がある。

例えば要支援1、2の方であれば、ある程度リハビリしたり、健康、生活が整えば、自立になってもおかしくないような方もいるけれども、実際問題、なかなか数を正確には知りませんが、自立になる方は少ないのです。私たちケアマネジャーはケアマネジメントする立場では、お元気になっていただいた後の生活。私たちは介護サービス事業者ですから、介護サービスを提供するのが仕事です。ただ、その後、元気になっていただいた後に、地域の中でこれだけ安心して元気になっていただけますよという具体的なものをお示しする知識や情報がまだまだ不足しているのかなと。

足立区で何百カ所もサロン活動があるということ、地域包括支援センターを中心にその情報が集まってはいるかもしれませんが、圧倒的多数、現場で動いているのは、ケアマネジャーなり、ヘルパーさんなりというところのスタッフ、人材がそういった情報までも理解しているかどうかで、私たち事業者の関わりも少し違った視点が見えてくるのかなと感じておりますので、その辺で、まだまだこちら情報も入手する努力が。発信していただくと非常にありがたいのかなと感じます。

少し小さい例なのですが、先程どこにどんな特技を持っているかというところで、自分が担当している方で思い出したのですが、やはりおひとり暮らしの方、高齢世帯の方が非常に増えています。そういった方のケアマネジメントをしていくうえで、どうやったら出ていただけるだろうかというところ、特に男性の方がなかなかデイサービスにつながりにくいということも感じているのです。

例えば、ある程度そういう方は少なからず軽度の認知症とか、軽度の鬱であるとかというところを発症しつつ、こもりがちになってしまっているところがあって、認定を受けました。私たちが受け入れに行きます。どうやって信頼関係をつくるか。そういう方を外に

お連れしようと思うと、この男性のこれまでの人生、趣味、特技は何だろうかなんてことを聞き出しながら、例えばデイサービスでそういうものがありますよとかあるのですが、そこにいきなりデイサービスでなくて、もしかしたらサロン活動のほうがより身近で行きやすいということかもしれませんし、あとは、いきなり知らない人間が入ってきて、外に行きましょうというのなかなか無理な話です。

この間会った方が、将棋がものすごく好きな方でして、とにかく将棋はしたいのだけれども、出たくないという方と信頼関係をつくるのにどうしたらいいのだろうか。包括さんに聞いたのが、将棋を趣味としている男性は年配の方は多くいらっしゃると思うのですが、そういった方がまず自宅に行って、将棋を一回指してくれないかみたいな、そこで突破口を開けるといいなという、本当にごくごく一つの例なのですが。

そういったところで、インフォーマルサービスと私たち介護事業者は言ってしまうのですが、つまり、活躍していただく。こちらとしてはそういった方に助けてもらう。逆のところでは、活躍していただける場を、介護事業者の立場でもつくることができるのか、マネジメントの部分で作りだすことができるのか。そのためにそういった情報がないと広がりを持っていけないのかなという感想を持ちました。

あと、閉じこもりともちょっと違うのですが、生活支援が必要になってくる方、やはり買い物の支援とかが多いかと思うのですが、これも私の持っている事例で、足腰が弱ってくると、どうしても買い物が不便になる。そこですぐヘルパーさんの利用となって、もちろんそれは必要なことだからいいのですが、これからの生きがいであるとか、自立ですとか、予防という観点では、介護サービス事業者ですからサービスを利用していただくのはもちろん必要なことだと思いますけれども、それ以外の方法、解決手段というのも豊富に用意されるべきだろうと思っています。

例えば、その方は足が悪くなってきたから、どうしても車に頼ってしまう。歩くのがちょっと大変だから、車のほうが楽なんだ。ただ、もう80代ですから、車の運転自体、今、高齢ドライバーの問題もありますので、大分危ない中でもそういったことをするしかない。

これは地方でよく買い物、移動のことが語られますけれども、結構この足立区でも往々にしてある問題。

例えばこういった本当に生活のちょっとした部分、介護保険サービスでは賅えない部分というのを、今、サービスの類型のところに出ましたけれども、具体的にこういったものがという洗い出し作業というのですか。私たちの介護が必要になってから、それから、介護が今後必要になってくるというところでの私たちの見立てとか、実際問題、担当している方たちからあがってくる問題をお伝えというか、課題としてあげる、そういった作業のところでは、介護サービス事業者の私たちが割と提供できること多いのかな。それをどう解決するかというのを、この場で語る材料として、何かそういったものを次回などお示しできると何か議論のきっかけになるのかなと思いますので、ちょっと意識しておきたいと思います。

酒井部会長

インフォーマルなサービスというもののご報告ありがとうございます。

小川委員、いかがでしょうか。

小川委員

訪問介護の小川です。よろしく願いいたします。

私、最後のほうになりましたので、先程来、お話を伺っていて、耳が痛いなと思っていたのですが、たまに休んだときに、朝起きて、夜寝るまでリビングとトイレを行ったり来たりして、一步も外に出ないというのがあるので、恐らくこのままいくと、今、議論されているような人物像ができあがってくるのかなと思って伺っておりました。

冒頭、井元委員のお話がありましたが、行政の方々も、ほかの団体、個人も含めてですけれども、今までいろんなサービスがあったり、名称のものをつくったりしてきたと思うのですが、機能させるまでが非常に難しく、私も含めですけれども、ただでさえおっくうなのに、自発的に動いていくというのはよほどの工夫が必要なのだろうと思いますので、私もどうしたら今日は一步外に出ようと思えるのかなというのを、ちょっとこれから心がけていきたいと思います。

それから、先程のなかで、サロンのスペースの話も出ていましたけれども、国等はもちろんですけれども、区も大分住宅を買っているのですかね、今、つくられたのですかね。空き家対策というのはすごく今、問題になっているようで、国は空き家をどうにか有効活用するとか、壊して売ってしまえばいいのではないとか、いろんなことを考えているのだと思います。家を壊すと税金が高くなるから壊さないでそのまま放っておくという方がかなり多くて、では、それを有効活用するかというと、手を入れるのに相当お金がかかってしまうから、そこまでやるのもどうかなというところがあったりするので、空き家についてどうにかしていかなければいけないというのも、これもテーマとしてあるのだと思うのです。

そう簡単な問題でもなさそうだとこのころで、冒頭、たくさんできてきているという話もありましたけれども、サロンなのか、あるいは生活困窮、貧困ビジネスから脱却していくなかで、戸建てなのか、古い木造のアパートなのかわからないですけれども、そういったものをうまく活用しながら、見守りの必要な方が、住み慣れた家をついの住みかというのが一番理想的なのかもしれない。

ただ、そこもゴミ屋敷になってしまって大変だとか、近所から火事になるのではないかというクレームがすごいという方は、申し訳ないけれども、ちょっと手を入れた木造のアパートでもいいですけれども、同じ地域のアパートに引っ越しをしていただいたり、そのアパートに集まってもらうという言い方が正しいかわからないですけれども、どここの誰々さんが入ってきて、別のところの誰々さんがそのアパートに入ってきて、その中で何となく相互に見守りというか、互助ではないですけれども、そういう作用が働き始めたり、あるいは、オフィシャルの人が見守るときに、効率という言い方がその場合

いいかわからないですけども、見守るなかでも非常に効率がよくなっていく。生活困窮もそうですし、貧困ビジネスに関係してしまっている人もそうですけれども、そういった人をその中から脱却させる。こちら側もサービスしやすい、見守りしやすい。

そのうちに、その中で見守り、助け合いが始まるという形がとれれば、一つ一つの事業なのかもしれないですけども、空き家対策であったり、今後のケアシステムの中の事業であったり、点と点のものを結び合わせることで、ちょっとずつ動き出すこともあるのかなと考えています。

それから、先ほど総合事業の話もありましたので、制度に関して、制度がどんどん変わっていきってしまう。ここで議論していることが、実行が3年後になってしまえば、その時には恐らく介護保険の制度も大きく変わっている可能性がある。総合事業が始まるなか、今、要介護で介護サービスを利用されている方のなかで、そのうち、昨日まではヘルパーさんが来ていたのだけれども、制度が変わってしまったから、今日は来られなくなってしまったということも、ひょっとするとなくはないのかなと。そういう状況も考えなくてはいけないのかなということもこれから出てくるのだと思うのです。

きょうは緑川委員、内藤委員がいらっしゃっていますけれども、例えば特技は何なのというと、私の部会は訪問介護部会なのですけども、ヘルパーとして働くことが特技という人が、80歳でも元気な方がかなり多いのですけれども、その方たちがちょっと自転車をこいであそこまで行くのは大変なのだけれども、私の特技を使って、ある程度専門性のあるサービスを提供したいという方がいたときには、シルバーさんでもいい、緑川さんのところのボランティアのところには何か集まっているところに行ってもいいのだけれども、もう少し専門性のあるサービスをしてみたいというような人がやはりいらっしゃるのです。

その人たちが逆に言うと、ヘルパーの仕事だったらちょっとやってみたいけれども、それ以外の庭いじりとかというところとちょっとしんどいし、やったことがないからできないというような方の働き口みたいなものを少し考えてほしいというような話も、私のところに来ているのです。

そういった、現場のヘルパーさんではなく、もっと管理職、あるいは経営者にかなり近いような方でも、そろそろ現役は引退するのだけれども、せつかく20年、30年、40年介護の業界で働いてきたから、このキャリアは使っていきたいという方もいらっしゃるので、そういった方の働き口というのをちょっと用意していく必要性もあるのかな。

そのなかで、今日、私の、皆さんからいうと右手になりますけれども、お二人いらっしゃるのですけれども、今回はここで働きたい、今回はそこで働きたい、でも、こちらにも登録しておきたいというのがうまく連携していけると、村上委員がおっしゃっていたように、それぞれの特技が生かされてきたり、ちょっとこちら、介護の人が揃っているのだけれども、木を切るのは得意ではないなというときにはご相談させていただいたりという、連携みたいなものがとれていくと、地域として支えていく、しかも、ほぼ既存のサービスを有効活用していくという意味では、今後、考えていかなければいけない。

先程言いましたけれども、引退してそれきりというのは寂しいという声がかかなり多いのですね。そういった方は働きたいのだけれども、専門的に介護を請け負っていくところが、NPOであるのかもしれないですけれども、オフィシャルな部分でそういうのは今のところあまりないようなので、そういったものの用意というのも心がけていかなければいけないのかなと思います。

まずは私の休日の過ごし方を工夫しなければいけないと思います。

以上です。

酒井部会長

ありがとうございます。

今、あるときはボランティア活動、あるときはシルバー人材としての活動、あるときは老人クラブの一員としての活動という、さまざまなものを連携していくこともあるのではないかとお話でした。

それでは、まだお話されていない橋本委員、いかがですか。

橋本委員

老人クラブ、シルバー人材センター、ボランティア団体、本当はそれで人数が増えていけば、社会から孤立している人がそれだけ少なくなっているということなのですが、現実的には今の状況はそれが必ずしも増えていない。むしろ減少しているようなところもある。

そうなってくると、それぞれの団体が個別にそれなりの団体を宣伝して、広報していく、訴えかけていくというのではなくて、ここで議論していくような全ての高齢者が関わって、外に出てくるときにこういうチャンネルがありますよというところの全ての機関が連合して、区民にこういうものがあるのですよということを訴えかけていくような体制が区として求められているのかなと思って聞いていました。

介護の関係の通所事業所もこうですよと、場合によっては、スポーツクラブもこんなものがありますよと、外に出ていくにはこんなものがあるんだということの、これも資源マップみたいなものが必要になってくるのかなと思っています。

もちろん、医療と介護の連携という中で、今までばらばらで情報提供された医療機関と介護事業所の総合的なマップをつくって、最低限提供していかなくてはいけないのですけれども、単にそれだけではどうも足りなくて、それ以外の、先程出てきたようなサロンであるとか、住区センターでやっている事業であるとか、さまざまなことが、ここにこういう場所がありますよということを提供できるマップみたいなものが必要であって、内藤委員がおっしゃられていたみたいに、地域ごとに縦断的に、今、ちょうど配食のチラシというのを年に1回ぐらいつくって、全区的に配食のチラシとかをまいているのですけれども、あんな形の地域ごとのマップを、その地域のほうに、シルバー人材センターに頼んでまいてもらうとか、そんなことをというのは、今後研究して、つくってそういうふうにするのはなかなか時間がかかると思うのです。そういうのを目標に平成32年、2025年に向

けて、足立区ではそういうことがもう行われているというようなことを目標につくりあげていければと思っています。

例えば老人祭りというのは変だけれども、とにかくそんな一堂に高齢者がみんな集まって、そこに行く楽しいイベントがあるみたいな、高齢者専門の、みんなブースなども、例えばイメージとして、区民祭りの一部みたいなものがみんな、ここに今日いらっしゃっているような団体を含めて広報できて、地域資源マップが配られるような局面、そんなものが2025年にできているようなことを目指して、事務局は大変だろうけれども、やってほしいと、部長としてはと思っています。

以上です。

酒井部会長

それでは、井元委員。

井元委員

一言だけ。足立らしい地域包括ケアシステムをつくってみたいなど。

手挙げ方式で、自分が何とかしたいというだけの受け皿をつくるのであれば、これは多分全国的に同じようなものができていく。

それではなくて、いかに周りの人が気づいて、近隣の人が気づいて、それをどういう風にその人の背中を押すかという、まさにシステムです。それを何とかこのケアシステムの中で作り上げていくと、本当にいろんな活動が生きていく、そういうシステムになり得るのではないかと。

それがなかったもので、様々なことを今までやってきましたけれども、何となくみんな中途半端で終わっていたのではないかとということで、今、孤立ゼロプロジェクトでは、それをかなりの部分、やろうとしています。そういう実績みたいなもの、やり方みたいなものもぜひここに反映させていただいて、足立らしいシステムを今後、つくってほしいと思いますので、ひとつよろしくお願いしたいと思います。

酒井部会長

それでは、皆様からの意見はかなり出たと思うのですが、よろしいですか。

内藤委員

手短に。

足元の問題は、やはり社会参加するということがいろんな意味で介護予防にはなると思うのです。

今、橋本委員がおっしゃいましたように、老人クラブ、ボランティア、シルバーと、ある種、今の高齢者は多様化していますから、それぞれの部門の仕事を全部持っているわけです。

例えばシルバーで、仕事はしたくないけれども、ボランティアは喜んで出るという人もいます。仕事もしたくない、ボランティアはどうも。だけれども、何となくみんなと集まってお茶を飲むのはしたいという人もいます。

ですから、まず、集客と言ったらおかしいのですけれども、そういった表へ出すためには「連合」、先程橋本委員がおっしゃいました連合、ある種のコラボレーションという形で、共同でそういった呼びかけをすることを区のほうでしていただくと、大変ありがたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

酒井部会長

ありがとうございます。

今日のこの委員会では、かなり様々なお話が出てきたと思います。

新たなサービスというものではないのですが、資源の確認ができたということ、あと、男性の方をどうやって資源化していくかというお話も、積極的な、また、詳細なものが出たのかなと思っています。

それから、足立区らしいサービスを構築するというのは、資源マップとかをつくっていく。また、それぞれあるサービスの、もしくは団体の活動をつなげていく。その知識を持つことによって、さらに紹介していける、発信していける、気づかせていただけるということが出てきたのかなと思います。

今後の課題としては、今、言った資源の総ざらい、また、発信の仕方の工夫というものが出てきたのかなと思います。

本日は、議事進行で皆様に限られた時間でご協力いただきまして、ありがとうございます。

最後に、事務局のほうから今日の連絡事項等を含めて、お願いしたいと思います。

依田高齢サービス課長

長時間にわたり、貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

本日いただきましたご意見を参考にさせていただきます。また足立区における介護予防・日常生活支援総合事業のあり方等々について、きちんと考えていきたいと思っております。

次回の開催についてはまだ決まっておりますけれども、決まり次第、またご案内させていただきますので、よろしく願いいたします。

事務連絡といたしましては、謝礼をお支払いする委員の方で、書類がまだお手元にある方がいらっしゃいましたら、お帰りの際で結構ですので、事務局のほうにお渡しいただければと思います。

また、車でお越しの委員の方がいらっしゃいましたら、駐車券の用意がございますので、あわせて事務局にお申しつけいただければと思っております。

それでは、委員の皆様、本日はどうもありがとうございました。気をつけてお帰りください。ありがとうございました。